古仏語辞典作成のために

Pour une rédaction d'un dictionnaire ancien français-japonais

岡田　真知夫

Machio OKADA

何年か前にある方から中世フランス語の辞書を作ってみる気はないかという打診を受けた。Greimas[1] や Van Daele[2] のものがあればとりあえず十分ではないだろうか，わざわざ日本で類書を出す意義があるだろうか，作るとなれば相当の時間とエネルギーを費やさなければならないだろう　―　こう思って，私は即答を避けた。自分が適任であるかどうかは一旦棚に上げて，興味をそそられる仕事ではあったが，どの程度の規模のものが作れるのかもはっきりしなかった。その後出版社から，一冊本で 7-800頁程度までなら可という感触を得た。また，Greimas, Van Daele, Godefroy (*Lexique*)[3] などの既存の一冊本の辞書を引く前に参照して便利と感じてもらえるもの，それらとの併用に耐えうるものが作れるのではないかという見通しも得た気になって，向こう見ずを承知の上で引き受けてしまった。

２年以上も前に作成した古仏語＝日本語辞典の執筆プランであるが，本学会の第33回大会の統一テーマがたまたま「ロマンス語の語彙」であったことと，なるべく多くの方々からご意見をうかがうことが出来ればそれに越したことはないという思いもあって，あえて披露させていただいた[4]。以下の文章は，その折に用意して臨んだ口頭発表用の原稿を，その文体も含めてほぼ忠実に転写したものである[5]。もちろん，必要と思われた加筆・修正を施し，ハンドアウトを本文（あるいは注）に取り込んでおいた。

*

まず，想定読者と目指す辞書のイメージを明らかにしておきます。

読者，あるいは利用者としては，二種類の層を考えています。ひとつは，現代語については既に中級レヴェル以上に達しているけれども，古仏語を学ぶのは初めてという方々です。初学者が初めて手にする辞書は，大抵はラルースの Greimas のものだと思います。ところが，Greimas の辞書を使って古仏語のテクストをある程度読みこなせるようになるまでには，私自身の経験に照らしてみても，かなりの時間が必要です。もちろん，学習者側の「努力」と「慣れ」も必要でしょうが，初学者に配慮した作り方をすれば，その時間は，ある程度短縮できるのではないかと思います。

想定しているもうひとつの読者層は，古仏語には既にある程度親しんでいるけれども，Greimas や Van Daele，あるいは Godefroy の *Lexique* といった従来の一冊本の辞書には多か

れ少なかれ不満を感じておられるに違いない方々です。ページ数の限られた辞書の宿命である語彙と用例の少なさはどうしようもありませんが，そのほかの不満については少なくする試みは可能なはずです。その試みがまがりなりにも成功すれば，従来の一冊本の辞書や10巻本の Godefroy[6] とか Tobler-Lommatzsch[7] などを引いてみる前に，参照して便利と感じてもらえる辞書になるでしょう。もちろん，従来の辞書に，とくに，大きな辞書に，とって代わるのは無理だとしても，それらとの併用に耐えうるものは十分作れるのではないかと思います。

要するに，あらたに古仏語辞典を編纂するにあたっては，初学者を古仏語により近づきやすくする，従来の辞書に対する既習者の不満を少なくする，言い換えれば，初学者・既習者を問わず，古仏語で書かれたテクストに，あるいは，古仏語の実態に，より近づきやすくする試みが必要だと思うのです。当然ながら，その試みは，従来の辞書の問題点を乗り越えるものでなければならないはずです。

Greimas その他の従来の一冊本の辞書の問題点は色々あろうかと思いますが，とりあえず，まず，重要な二点のみ指摘して，それにどう対処するつもりかを次にお話しします。

まず，目指す語がなかなか見つからない，読んでいるテクストに出てきた語形の正体が掴めないということが，よくあるのではないかと思います。大辞典にしか出ていないような特殊な語は別として，比較的よく使われる語でありながら，少なくとも初学者にとっては，いくら辞書を引いてもなかなかその正体が掴めないという語が，案外あるのではないでしょうか。たとえば，*aint* (< amet), *nont* (< nom(i)net) が *amer*, *nomer* の接続法現在３人称単数であることは，Greimas を見てもわかりません。また，-x で終わる *caviax* という語形に初めて出会った学習者が，現代語の *cheveu(x)* にあたる語の単数主格か複数被制格であると判断するのは，さほど容易なことではないでしょう。これらの語形は，歴史音声学，歴史形態論，発音と書記法の対応関係，方言特徴などの基本的な知識を身に付けていない限り，説明はもちろんのこと，理解も不可能です。ところが，初学者は，そうした知識をまだほとんど身に付けていないか，身に付けていたとしても，その知識はまだ不確かな段階にあります。既習者にしたところで，忘れてしまうことはしばしばあります。何年か前に，ある読書会 — 古仏語に関してはベテランと言っていい方々も参加している — で *Eneas* という12世紀の作品を読んでいた時に，まさに，*nont* が出てきたことがあります (v.6503)。ところが，出席者全員がしばらく考え込んでしまったということです。（私自身も，その読書会の20年来のメンバーですが，たまたま都合で欠席していました。）さて，以上の三つの語形のうち，*caviax* は，語末が *-us* という綴りで Van Daele にのみ出ています。*aint* も同様です。しかし，*nont* はどの辞書にも見当たりません。頻繁にお目にか

かる *cuit* が，*cuidier* の直説法現在１人称単数であることが掴めるのも，やはり Van Daele のみです。尤も，これらのどの語も，慣れてしまえば，そして，文脈に照らしてみれば，比較的容易に正体が掴めるものですが，慣れていない，あるいは，慣れてはいても忘れてしまうことがあり得る学習者を相手にするのであれば，このような問題が比較的楽に解決できる辞書であるほうがいいはずです。

cuit, *aint*, *nont* などは，やはり，見出し語として挙げておいたほうがいいでしょう。しかし，これも程度問題で，頻度の高いものに限らざるを得ません。たとえば，*Eneas* 8272 に Ce *qui*, ne me neüst noiant という文がありますが，この *qui* [kɥi] は *cuit* に等しいものです。この *qui* という形まで，関係詞・疑問詞の *qui* [ki] とは別に見出し語として立てるのは，行き過ぎでしょう。この方式を全体に及ぼせば，見出し語の数は限りなく増えてしまいます。綴り字の <q> が，<c> や <k> と同じように，軟口蓋の [k] を表し得ることと，[kɥit] の語末の [t] が，舌尖歯茎 (apico-alvéolaire) という調音点を同じくする後続子音 [n] に同化吸収されている可能性に思い至ることは，書記法と発音の対応関係や音声学の基礎知識を身に付けていない限り不可能でしょう。このような語形まで本文に組み込むことは「経済的」ではありません。同じことは方言形についても言えます。たとえば，*Lancelot* XXI* (versions courtes) 1-3 に je vous *cuits* bien par ceste voie mener という文が見られます。やはり，*cuit* に等しいこの *cuits* [kɥitʃ] (?) という特殊な形まで本文に取り込むことは出来ないでしょう[8]。この種の問題は，可能な範囲内で，序文にまとめてみようと思います。Greimas のように，どうせ読まれないだろうから省く，というようなシニカルな立場は取りません[9]。私としては，読んでもらいたい，読んでくれる者もいるだろう，という素直な立場を取りたいと思います。もちろん，序文で歴史音声学や歴史形態論を展開するわけにはまいりませんが，古仏語の学習者が是非知っておかなければならないと思われる発音と書記法に関する基本的な事項と語形変化の仕組みは，出来るだけ使いやすい便覧のようなかたちにまとめて，参照できるようにしておきたいのです。また，残っている文学的テクストが質・量ともに他の諸方言に勝るアングロ＝ノルマンとピカルディー方言の音声と形態上の特徴も，序文にまとめておきたいと思います。アングロ＝ノルマンの *mult*, *tut* や，ピカルディーの *cambre*, *kief* のような形を，*molt*, *tot* や *chambre*, *chief* などとは別に，いちいち見出し語として立てるのは，やはり「経済的」ではないでしょうから。形態については，「中央」の標準的なパラディグムを掲げた上で，アングロ＝ノルマンとピカルディー方言に特徴的な形を付記しようと思います。１例だけ挙げておけば，ピカルディー方言なら，１人称複数と２人称複数の所有詞結合（合接）形（formes conjointes) の曲用 *nos - no - no - nos, vos - vo - vo - vos* (＝男性，女性: *no - nos, vo - vos*) は，漏らすわけに

はゆかないでしょう。

動詞は厄介な代物ですが，スペースとしては巻末を利用して，活用の仕組みを明らかにし，不定法で挙げる本文の見出し語と有機的にリンクさせる積もりです。

まず，語尾にポイントを絞って活用モデルを掲げます。そして，未完了系列（infectum）の現在諸時称〔直説法現在・接続法現在・命令法＋現在分詞・ジェロンディフ〕と，完了系列（perfectum）の諸時称〔単純過去・接続法半過去＋過去分詞〕の２系列それぞれについて，語幹の交替パターンを網羅的に示した上で，なんらかの記号を用いて，本文の見出し語，すなわち不定法とリンクさせます。

たとえば，いわゆる *-er* 動詞（Bartsch の法則が働く場合には *-ier* 動詞）の未完了系列の現在諸時称なら，その語尾は次のようになるでしょう。

ind. prés.: *-ø, -es, -e, -ons, -ez (-iez), -ent*
subj. prés.: *-ø, -s, -t, -ons, -ez (-iez), -ent*
impér.: *-e, -ons, -ez (-iez)*
part. prés. - gér.: *-ant*

語幹は，４つだけ例を挙げておけば，次のような交替パターンを示すことになります。｜の左側が強語幹で，右側が弱語幹です。

aim- / ain- ｜ *am-* (subj. prés. 2 *-ns* ＞ *-nts*〔*-nz*〕＞ *-ns*) — *amer*
lief- / liev- ｜ *lev-* (subj. prés. 2 *-fs* ＞ *-s*, 3 *-ft* ＞ *-t*) — *lever*
mein- (meign-) ｜ *men-* (subj. prés. 2 *-ns* ＞ *-nts*〔*-nz*〕＞ *-ns*) — *mener*
parol- ｜ *parl-* — *parler*

-er 動詞の場合，弱語幹がそのまま完了系列の諸時称の語幹にもなるので，この交替様式をそのまま見出し語の後に記載してしまってもいいでしょう。恐らく，読者にとってはその方が便利かと思います。もちろん，その場合，たとえば *mener* のように未来と条件法の語幹が不定法その他の弱語幹と異なるなら，それも併記した方がよろしいでしょう。つまり，*menr- / merr-* という語幹ですが（cf. *menrai / merrai, ...; menroie / merroie, ...*），これを，強語幹 *mein-* ないし *meign-* 対弱語幹 *men-* という語幹の交替とともに記載しておけば，この *mener* という動詞の活用の全容は掴めるはずです。

完了系列の諸時称の場合，弱変化タイプと強変化タイプに分けて説明した方がよろしいでしょう。まず，弱変化タイプの単純過去と接続法半過去の語尾は，a, i, ü という３種類のテーマ母音も含めて書けば，次のようになります。

p. simple: *-ai, -as, -a(t), -ames, -astes, -erent (-ierent)* — ex. *amer*
subj. impf.: *-asse, -asses, -ast, -issons, -isseiz (-issez), -assent*
p. simple: *-i, -is, -i(t), -imes, -istes, -irent* — ex. *partir*
subj. impf.: *-isse, -isses, -ist, -issons, -isseiz (-issez), -issent*

p. simple: *-ui, -us, -ut, -umes, -ustes, -urent* — ex. *morir*
subj. impf.: *-usse, -usses, -ust, ...*

強変化タイプの語尾（テーマ母音は i, o-ü）の場合も，テーマ母音に後続する活用語尾は，単純過去も接続法半過去も，弱変化タイプと同じです。異なるのは，単純過去３人称単数の *-t* が概ね維持されるという点だけです: *-(i), -s, -t, -mes, -stes, -rent.*

強変化タイプの完了語幹については，まず，単純過去の弱語幹と接続法半過去の語幹が重複する，つまり同一である，ということをことわっておかなければなりません。その上で，強語幹と弱語幹の交替リストを作らなければならないわけですが，étymon の語幹末子音の処理（feci > *fis*, *voli〔← volui〕> *voil*, etc.), 古仏語の枠内での弱語幹の進化（*fesis* > *feïs*, *desis* > *deïs*, etc.), 「語中音添加」（épenthèse) と呼ばれる現象（*tindrent, voldrent, distrent,* etc.) などを考慮に入れれば，テーマ母音が i の完了語幹の交替リストは，複雑なものになるでしょう。テーマ母音が o-ü のものも含めて，いくつか例を挙げておきます。やはり，｜の左側が強語幹，右側が弱語幹です。

〔voy. thématique: i〕
vi- ｜ *veï-* — *veoir*
tin- ｜ *teni-* (p. simple 6 *-nr-* > *-ndr-*, ただしピカルディー方言は *-nr-* のまま）— *tenir*
〔voy. thématiques: o-ü〕
o- ｜ *eü-* — *avoir*
po- ｜ *peü-* — *pooir*
bu- ｜ *beü-* — *boivre*

以上のような具合にして，未完了系列と完了系列の諸時称の語幹と語尾が明らかになれば，あとはそれに，強型と弱型がある過去分詞と，未来と条件法の同一語幹を付け加えれば，大部分の動詞の活用の全容は掴めるはずです。たとえば，*ferir* と *querre (querir)* という動詞なら，次のような情報を与えれば十分でしょう。（IF = infectum, PF = perfectum, « » 内はテーマ母音）

〔*ferir*〕IF: *fier-* ｜ *fer-* ‖ PF «i»: *feri-* ‖ fut. - cond.: *ferr-* ‖ part. passé: *feri(t), feru*
〔*querre (querir)*〕IF: *quier-* ｜ *quer-* ‖ PF «i»: *quis-* ｜ *quesi-* (> *queï-*) (p. simple 6 *-strent*) ‖ fut. - cond.: *querr-* ‖ part. passé: *quis*

ここから，次のようなパラディグム全体が見通せるはずです。

〔*ferir*〕ind. prés.: *fier, fiers, fiert, ferons, ferez, fierent* ‖ subj. prés.: *fiere, fieres, fiere, ...* ‖ impér.: *fier, ferons, ferez* ‖ ind. impf.: *feroie, feroies, feroit, ...* (est: *ferive, ferives, ...*) ‖ p. simple: *feri, feris, feri(t), ...* ‖ subj. impf.: *ferisse, ferisses, ferist, ...* ‖ fut.: *ferrai, ferras, ferra, ...* ‖ cond.: *ferroie, ferroies, ferroit, ...* ‖ part. prés. - gér.: *ferant* ‖ part. passé: *feri(t), feru*

〔*querre (querir)*〕 p. simple: *quis, quesis - queïs, quist, quesimes - queïmes, quesistes - queïstes, quistrent* ‖ subj.impf.: *quesisse - queïsse, quesisses - queïsses, quesist - queïst,* ... ‖ 他は *ferir* と同パターン

Van Daele の辞書は，動詞の項目（article）で，その意義・用法とともに注意すべき活用形を挙げています。そしてそれが，一つのポジティブな特徴ともなっています。全体が26行からなる *querre* の項目（pp.386-7）では，20行ものスペースを使って，活用形を列挙しています。その部分を転載してみましょう。

Conjug.: rad. tonique *quier-*, rad. atonc *quer-*. ‖ Ind. pr.: S.1 *quier* (post' *quiers*); 2 *quiers*; 3 *quiert (quert)*; P.1 *querons*; 2 *querez, querés*; 3 *quierent (querent).* ‖ Imparf.: S.1 *quereie* > *queroie,* etc. ‖ Parf.: S.1 *quis*; 2 *quesis, queïs*; 3 *quist*; p.1 *quesimes*; 2 *quesistes, queïstes, quistes*; 3 *quistrent, quisent, quirent.* ‖ Fut.: S.1 *querrai* et ainsi de suite. ‖ Impér.: S.2 *quier (quer)*; P.1 *querons*; 2 *querez.* ‖ Subj. pr.: S.1 *quiere (quierge* §69 n.*)*...; P.1 *querions*; 2 *queriez*; 3 *quierent (quiergent).* — Subj. imp.: S.1 *quesisse, queïsse,* etc. ‖ Ppr.: *querant* — Pp.: *quis.*

ご覧のように，随分詳しく記載されています。はたして，ここまで書く必要があるでしょうか。私には，これはスペースの無駄遣いだと思えます。活用に関する情報を本文に盛り込むということなら，この動詞の場合，私が上に示したコンパクトな情報でほぼ事足りているからです（もちろん，方言形や後代の形は除きます）。

古仏語動詞のパラディグムの形成を，音声進化と類推作用の複雑な絡み合いが十全に読みとれるような形で提示するのは無理でしょうが[10]，サンクロニックな視点から，出来るだけ整理された記述を試みて，本文の見出し語である不定法とリンクさせることは可能だと思います。この試みが成功すれば，特殊な形を除き，Fouché[11] や Pope[12] や Lanly[13] などの本をいちいち参照しなくても，大多数の動詞の形の正体は掴めるようになるでしょう。

単語の正体がわかっても，その意味・用法が，必ずしも正確には掴めないというのが現行の一冊本の辞書に対するもう一つの小さくない不満ではないでしょうか。*ire* という語が，怒り（colère）とともに心理的あるいは精神的な苦痛（angoisse, chagrin）も表し得ることは，Greimas, Van Daele, Godefroy (*Lexique*) のいずれからも読み取れますが，戦いの描写によく出てくる (s'entreferir) par molt grant *ire* という言い回しの意味は，この二つの語義からでは掴みきれません。荒々しさとか激越さ(impétuosité) というもう一つの意味を挙げておくべきなのに，どの辞書も挙げていないのです。Al port vindrent assez *matin* (*Brut* 11281) という文を見て，イタリックの *matin* が，副詞として使われているらしいことは容易に見当がつきますが，実際にそれが確認できるのは Van Daele のみです。しかしながら，その Van Daele にも，こういう場合あった方がよい用例が挙げられていません。このような不

備は出来るだけ解消したいと思います。

さて，次に，*cuidier* という動詞を例に挙げて，個々の単語あるいは項目 (article) の記述法を紹介します。その前に，まず，見出し語の取捨選択をどの様に行うか明らかにしておかなければなりません。

Zink 氏によれば，古仏語の語彙は，13世紀末時点で 20,000 から 25,000 語になるそうです[14]。自分自身でざっと数えてみたところ，現行の一冊本の辞書の収録語数は，次のような数字になっています: Rouquier[15] 2,800, Urwin[16] 3,800, Van Daele 20,000, Greimas 27,000, Godefroy (*Lexique*) 60,000。私としては，この中から，Van Daele のものを基準にして適宜取捨選択する予定です。Martin 夫妻のフランス語学の文献ガイドを見ると，Greimas の辞書には，「Godefroy の Complément も Tobler-Lommatzsch も *FEW*[17] も参照していない欠落と誤りの多い辞書である」という Straka による手厳しい評価が下されています。一方，*Van Daele* のものには，「残念ながら稀覯本になってしまっているけれども，とてもよい (fort bon) 辞書である」という一行が添えられています[18]。fort bon は少しオーバーな褒め言葉で，assez bon 程度に和らげた方がよろしいかと思いますが，これまでの私のお話しからも，Van Daele のものが，比較的よく出来た辞書であるという印象は否めないのではないでしょうか。もちろん，すでにお話ししたように，Van Daele の辞書にも不備や欠落はあります。たとえば，盾の裏側の把手（握り）を意味する *enarme* というよく出てくる名詞が抜け落ちていますが，当然補わなければならないでしょう。

では，*cuidier* を例として，どう書くか具体的に説明します。記号・略号の使い方，レイアウト等には改善の余地があるはずです。

cuidier (cogitare) 〔cuit- / cuid- | cuid-〕 vt.
1. 考える，思う（penser, croire)
(+ compl. + attr.) Ele la (=la novele) *cuide* vraie. *Charrette* 4163「彼女はそれ（報せ）を真に受ける」(+ inf.) Or vos demant ge... quanz chevaliers vos *cuidiez* avoir ocis de vostre mein en ceste queste. *Mort Artu* 3, 11「では尋ねるが，そなた，この探索で何人の騎士をその手で殺めたと思う」(+ que ind. / subj.) Je *cuit* qu'il fera bien vostre besoigne. *G. de Dole* 4283「彼ならきっとあなたのお役に立つと思います」*Cuida* que fust Sarrazin ou Escler. *P. d'Orange* 145「サラセン人かスラブ人かと思った」
2. (+ inf.) ～しようと思う（avoir la volonté de); もう少しで～する（manquer de, faillir) Ge te *cuit* bien guïer. *P. d'Orange* 1443「私がちゃんと案内してさしあげますよ」Voit le la damme, dou sens *cuida* issir. *Ami et Amile* 1124「奥方はそれを見ていまにも気が狂ってしまいそうだった」
n. m. au mien *cuidier* 私の考えでは（à mon avis, à ce que je pense)
hist. 16c 以降廃用. 合成語・派生語 *outrecuidant, -dance* に跡をとどめる.
occ. *cuidar, cujar*

まず，見出し語の後に étymon を挙げます。Zink 氏によれば，古仏語の語彙の95%はラテン語源だそうです[19]。そのラテン語源の場合には，わざわざ lat. とか片仮名の「ラ」というような略号はつけません。他の言語を étymon として持つ場合は，たとえば *garnir* (germ. *warnjan), *jolif* (scand. jôl 祭りの名）のようにします。phonétique な形と借用形の区別も可能な限り明らかにしておいた方がいいでしょう。また，合成・派生等の見出し語の語形成＝語彙形態論（morphologie lexicale）に関わる事実も，必要な場合には，略記しなければなりません: *forsborc* (foris + burgum); *espoir*, adv. «peut-être» (*esperer* の直説法現在１人称単数. 直訳: «j'espère»); *oïl* «oui» (lexicalisation ← *o il* «cela il»), etc.

語と成句の意味は，Robert-Signorelli の伊仏・仏伊辞典[20] や Bartsch の *Chrestomathie*[21] などと同じように２カ国語で，つまり，日本語とフランス語で挙げます。用例に付けるのは日本語訳だけにします。

用例は，なるべく自分自身読んだことがあるテクストから採りたいのですが，私の読書量は限られていますし，また偏りもあるので，当然，Tobler-Lommatzsch や Godefroy その他から借用する必要も出てくると思います。しかし，その場合にも，必ず実際の作品にあたって確認します。確認できないときは採用しません。よく使われる成句を除いて，引用には必ずレフェランスを添えます。これは，文語辞典である以上，必要な手続きでしょう。

用法や連語関係等，語の comportement は，出来る限り用例を挙げて明示します。しかし，スペースの無駄遣いは避けなければなりません。たとえば，*enarme*（前記），*escarlate*「エカルラット（鮮やかな色—元来は青—の絹布）」，*piz*「胸」，*isle*「島」のようないわゆる「実語」（mots pleins）には，用例はほとんど不要でしょう。

収録語彙の下限は，14世紀初頭ということにして，中仏語（moyen français）は除外します。Greimas と Godefroy (*Lexique*) の *cuidier* の項を見てみると，«avoir de la présomption»「思い上がる」「うぬぼれる」という語義を挙げていることが分かります[22]。Wartburg の *FEW* にも，確かに，代名態でこの意味をになうことが記されています。しかしながら，1330年頃という注記も添えられています[23]。ですから，私の場合は，これを採用しないわけです。もう一つ例を挙げておきます。Greimas と Van Daele が見出し語に立てている *hurler* は，Robert の *Dictionnaire historique*[24] や *TLF*[25] によれば，1385年頃，後期ラテン語の urulare から借用した形なので，収録しません。結果的に，1170年代初出の *(h)ul(l)er, usler* のみが見出し語となります。また，両者と Godefroy (*Lexique*) が見出し語に立てている *hurleur* «crieur public»も，1350年頃，しかも，厳密には *-rl-* ではなく *-ll-* と綴った形で初出なので，やはり収録しません。このように収録語彙の下限を14世紀初頭と定めることによって，ある程度の分量の語と語義が，従来の辞書から除かれることになります。

さらに，歴史欄を設けて，古仏語時点を起点として，現代語とのつながりを浮き彫りにする prospectif な（「未来展望的」な）コメントを適宜添えようと思います。いま挙げた *(h)ul(l)er, usler* のその欄には，「*hurler* (1385頃) ← bas lat. urulare)」という注記が書き込めるでしょう。また，たとえば，*chair*（古仏語ならば *charn - char*）と *viande* のような関連語についてのコメントも，この欄に盛り込みたいと考えています。

最後に，対応する中世オック語の形を挙げておくことにします。オイル語あるいはオイル語文学を学ぶ学習者の少なからぬ部分が，同時に，オック語あるいはオック語文学を学んでいる，あるいは学ぼうとしている，ということを考えれば，これは決して無意味な試みではないでしょう。

新たに古仏語辞典を作るにあたって，10巻本の Godefroy と Tobler-Lommatzsch はもちろんのこと，ほぼ同規模の語数になる Van Daele と Greimas には多くを負うことになるでしょうが，それらの平均値を出して，それを記述するというような愚かなことは避けなければなりません。誤りと思えるところは正し，不備は補うようにしたいと思います。そこで，最後に，基本的な語彙について，Van Daele と Greimas の両者が書き漏らしている用法で，これまでに気付いているものをいくつか指摘した上で，この報告を終えることにします。

たとえば，「ひと」を意味する *(h)ome* の単数主格である *(h)om, on* が，不定代名詞として文の主語に立ち，現代語の *on* とほぼ同じ価値を帯びることは，両者とも書いていますが，否定的な含みのある文脈において，格に関わりなく «quiconque» «personne»で置き換え可能なケースがあることは，どちらも書き漏らしています。Moignet も，代名詞化した単数主格の *on* に対応する被制格はないと言い切っていますが[26]，次に引くような用例を見れば，修正しなければならない断言であるように思えます。 — Del chastel senz congié turnai Si que a *hume* ne parlai. *Brut* 8764「私は，暇を乞わずに城から戻り，誰にも声を掛けなかったのだ」念のため，主格の例も挙げておきましょう。 — Et seut de riviere et de bois, D'eschés, de tables plus k'*om* nés. *Escoufle* 97「彼は，川辺や森の猟，チェスやトリックトラックに誰よりも精通していた」

また，前置詞の*de*が，場所を表す他の前置詞や副詞の前で，Ménardの言葉を借りれば，«mot-outil vide» として使われることがあります[27]。ところが，両者とも，この *de* の用法を記載していません。次の２例を参照してください。 — Un paile ot estandu el pré Ou li deu furent aporté Et les idres ou il croient; *De* desor aus jurer devoient Turnus et Eneas andui. *Eneas* 9308「...T と E がともにその上に手を置き宣誓するはずだった」Vasals, ...a moi antant, C'est l'enfernal descendemant, Prouz t'estuet estre et vasal, Se venir vels *de* la aval. *Ibid.* 2378「...彼処まで下りて行きたいのなら，勇猛果敢であらねばならぬぞ」（女予言者

シビュラが冥界に下ろうとしているエネアスに語った言葉）

さらには，「恐らくは」位の意味の決して稀とは言えない中性の指示詞を用いた成句 puet *cel* estre を，どちらも挙げていません（たとえば *Brut* 8869, 10890)。

もう一つだけ指摘しておきます。次の二つの文を較べてみれば分かると思いますが，*tant* が列挙されるとき，*que* が列挙された場合と同じと言っていい価値を帯びることがあります。この事実を，Van Daele も Greimas も，さらには Ménard も書き漏らしています。— De plusurs terres i veneient Cil ki pris e enur quereient, *tant* pur oïr ses (= d'Arthur) curteisies, *Tant* pur veeir ses mananties, *Tant* pur cunuistre ses baruns, *Tant* pur aveir ses riches duns. *Brut* 9775-8. N'ont plus de la bataille cure, *Que* por la nuit qui vient oscure *Que* por ce que molt s'antredotent. *Yvain* 6214-5. 明らかに，*pur* / *por* の価値は異なります。*Brut* では「目的」，*Yvain* では「原因」を表しているでしょう。しかし，その「目的」や「原因」を列挙して提示する *tant* と *que* の機能に違いはありません。

[注]

1）A.J. Greimas, *Dictionnaire de l'ancien français jusqu'au milieu du XIVe siècle,* Paris, Larousse, 1968.

2）H. Van Daele, *Petit dictionnaire de l'ancien français,* Paris, Garnier, 1944.

3）F. Godefroy, *Lexique de l'ancien français,* publié par les soins de J. Bonnard et Am. Salmon, Paris, Champion, 1968 (1ère éd. 1901).

4）発表会場でアドヴァイスやご指摘を下さった方々と，このプランに最初に目を通してくださった三宅徳嘉先生に感謝いたします。

5）「…である」式のいわゆる論文調は，個人的なプランの報告という発表内容自体にそぐわないのではないかと判断した。

6）F. Godefroy, *Dictionnaire de l'ancienne langue française*, 10 vol., Paris, Vieweg, 1881-1902.

7）A. Tobler et E. Lommatzsch, *Altfranzösisches Wörterbuch*, Wiesbaden, Steiner, 1925-.

8）Cf. éd. A. Micha, t.III, p.xiii. 底本には «couleur picarde» あり。

9）Greimas, p.viii 参照。

10）この困難な課題へのアプローチとして，矢島氏の最近の仕事に注目したい。—「フランス語動詞語幹の強形，弱形と類推作用について」愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）24号（1992), pp.299-313, «L'analogie en latin vulgaire, les formes verbales»『ロマンス語研究』26号（1993), pp.33-37,「仏語動詞の現在語幹の形成とアナロジーについて」同26号（1993), pp.107-114,「フランス語における動詞語幹の交替について」同27号 (1994), pp.67-71,「ガロ・ロマンス語におけるいくつかの類推現象について」同28号(1995), pp.87-94.

11）P. Fouché, *Le verbe français, étude morphologique*, 2e éd., Paris, Klincksieck, 1967.

12）M.K. Pope, *From Latin to Modern French with especial consideration of Anglo-Norman*, 2e éd., Manchester UP, 1952.

13) A. Lanly, *Morphologie historique des verbes français*, Paris, Bordas, 1977.

14) G. Zink, *L'ancien français (XIe - XIIIe siècle)*, 2e éd., Paris, PUF, 1990, p.103.（岡田訳『古仏語〔11-13世紀〕』白水社コレクションクセジュ，1994, p.104.)

15) M. Rouquier, *Vocabulaire d'ancien français*, Paris, Nathan, 1992.

16) K. Urwin, *A short Old French dictionary for students*, Oxford, Blackwell, 1946.

17) W. von Wartburg, *Französisches etymologisches Wörterbuch*, 1922-.

18) R. Martin et E. Martin, *Guide bibliographique de linguistique française*, Paris, Klincksieck, 1973, p.133.

19) G. Zink, *op. cit.,* p.103.（邦訳書, p.104.)

20) P. Robert et A. Arizzi (sous la direction de), *Dictionnaire français-ialien, italien-français (Dizionario francese-italiano, italiano-francese)*, Paris / Milano, Dictionnaire Le Robert / Signorelli, 1981.

21) K. Bartsch, *Chrestomathie de l'ancien français (VIIIe -XVe siècles) accompagnée d'une grammaire et d'un glossaire,* 12e éd. revue par L. Wiese, Leipzig, 1927. 本書の glossaire を見ると（p.389, s.v. *cuidier*), *au mien cuidier* には *selon moi, nach meiner Meinung* という具合に，現代フランス語とドイツ語による釈義が施されている。

22) Greimas, p.154; Godefroy (*Lexique*), p.114.

23) *FEW*, t.II, p.840.

24) A. Rey (sous la direction de), *Dictionnaire historique de la langue française*, 2 vol., Paris, Dictionnaires Le Robert, 1992, t.I, p.983.

25) P. Imbs et B. Quemada (sous la direction de), *Trésor de la langue française*, 16 vol., Paris, CNRS, 1971-1994, t.IX, p.996.

26) G. Moignet, *Grammaire de l'ancien français*, 2e éd., Paris, Klincksieck, 1976, p.39: «Il n'existe aucune forme de cas régime qui y corresponde.» (y= au cas sujet sing. pronominalisé: *(h)om, on*). Cf. F. Jensen, *Old French and comparative Gallo-Romance syntax*, Tübingen, Niemeyer, 1990, §499.

27) Ph. Ménard, *Syntaxe de l'ancien français*, 3e éd., Bordeaux, Bière, 1988, §320, 2, r.2.

[引用作品]

Ami et Amile, chanson de geste, éd. Peter F. Dembowski, Paris, Champion, CFMA, 1987.

Chrétien de Troyes, *Le Chevalier de la Charrette*, éd. M. Roques, Paris, Champion, CFMA, 1972.

Id., *Le Chevalier au Lion (Yvain)*, éd. M. Roques, Paris, Champion, CFMA, 1974.

Eneas, éd. J.-J. Salverda de Grave, 2 vol., Paris, Champion, CFMA, 1968-1973.

Jean Renart, *L'Escoufle, roman d'aventure*, éd. F. Sweetser, Genève, Droz, TLF, 1974.

Id., *Le Roman de la Rose ou de Guillaume de Dole*, éd. F. Lecoy, Paris, Champion, CFMA, 1974.

Lancelot, roman en prose du XIIIe siècle, éd. A. Micha, 9 vol., Genève, Droz, TLF, 1978-1983.

La Mort le roi Artu, 3e éd. J. Frappier, Genève, Droz, TLF, 1964.

La Prise d'Orange, chanson de geste de la fin du XIIe siècle (rédaction AB), 7e éd. Cl. Régnier, Paris, Klincksieck, 1986.

Wace, *Le Roman de Brut*, éd. I. Arnold, 2 vol., Paris, SATF, 1938-1940.

[参考書目]

〔報告したプランの作成段階で参照した文献というよりは，プランを実現するために必要な主な «instruments de travail» として略記する。すでに [注] にレフェランスを記してあるものが少なくない。〕

Greimas, Van Daele, Godefroy (*Lexique*), Urwin, Rouquier のほかに，古仏語辞典としては，Godefroy の10巻本，Tobler-Lommatzsch, *Anglo-Norman Dictionary*, Baldinger (*Dictionnaire étymologique de l'ancien français*).

語源，語の歴史（含用法・語義），初出年代等については，Bloch-Wartburg, *FEW*, *Dictionnaire historique de la langue française* (Robert), *TLF* («Etymol. et Hist.» の欄），*REW*, ラルースの歴史語源辞典など。

対応する中世オック語については，*REW*, *FEW* および Raynouard (*Lexique roman*), Levy (*SW* + *Petit dict.*)

語義の決定，用法の記述にあたっては，上記辞典類のほか，特定の作品の glossaires や語彙研究（Foulet の『ロランの歌』と『ペルスヴァル第一続編』，Foerster の *Wörterbuch zu Kristian von Troyes*, Keller の *Vocabulaire de Wace*, Burgess の *Vocabulaire pré-courtois* など）や，シンタクスを扱った本（Foulet, Ménard, Moignet, Jensen, etc.) も参照する。Matoré (*Le vocabulaire de la société médiévale*), Andrieux-Reix (*Ancien français - Fiches de vocabulaire*) なども参考になる。

巻頭（発音と書記法，名詞・形容詞・代名詞類の語形変化，方言特徴）と巻末（動詞の活用）の執筆にあたっては，様々なマニュアル・研究書が参考になる。たとえば，方言特徴についてなら，まず Schwan-Behrens, Pope が参考になるだろうし，アングロ＝ノルマンとピカルディー方言に限って言えば，基本的なポイントは概ねおさえている Zink 氏の *L'ancien français* も十分役立つ。